

認知症カフェ、認知症サポーター、 ボランティア育成活動を有機的に 組み合わせたソーシャルワーク実践



写真はすべて本人の承諾を得たうえで利用している。

「興味」から「支える」への
段階的取り組み

株式会社スマイルソーシャルワーカーズ
江藤 渉

作成日：令和元年12月26日

取り組みの概要

- 報告者である江藤渉は、佐賀県唐津市において平成25年に社会福祉士の仲間と2名で「まちづくり」を目的とした「株式会社スマイルソーシャルワーカーズ」を設立し、地域におけるソーシャルワークの実践を行ってきた。
- 本報告は、「株式会社スマイルソーシャルワーカーズ」が実践する、地域での取り組みについての報告である。
- 株式会社スマイルソーシャルワーカーズでは、地域力の向上の目的を達成するためには地域住民個々の意識や考え方、知識に違いがあることを前提に、それぞれに応じた学びや意識の変容が必要と考えた。
- 地域住民のそれぞれの意識等に合わせて、認知症サポーター養成講座、認知症カフェ、ボランティア育成の取り組みを、意識等のレディネスに応じて組み合わせ、有機的につながるような仕組みを意識することで、地域力向上の取り組みを実践してきた。
- それぞれの取組みは、特に独創性や革新性のあるものではないものの、個々の取組みのつながりを意識した実践を行なうことで、地域力の向上に結びついたその過程について紹介したい。

取組みの概要

興味から学び、実践への3ステップ

学びを活かして認知症カフェの運営へ参画

ステップ③
実践すること

ステップ①
興味を持つこと

ステップ② 学びを深
めること



認知症サポーター養成講座など
実践を視野に入れた学び

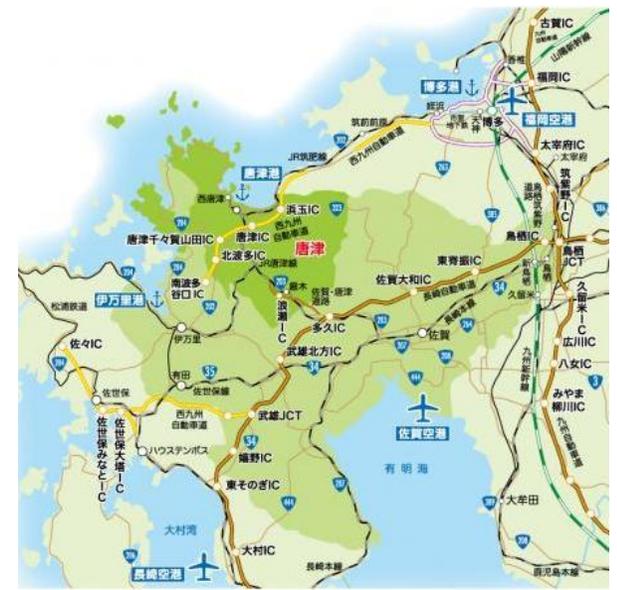
ボランティアの育成
学びと実践

認知症カフェへの参加
まずは楽しむことから

ステップを意識することで地域力の向上に

地域の概要（佐賀県唐津市）

- 人口：120,609人
- 65歳以上人口：38,284人
- 高齢化率：31.7%
- 日常生活圏域数：27カ所
- 地域包括支援センターの数：市直営（本庁1カ所、サブセンター3カ所、出張所1カ所）
- 認知症地域支援推進員数：6名
- 主要産業：主に第1次産業（農業・漁業）及び第3次産業（観光業）
- 地理的特徴：人口は佐賀県で2番目に多く、面積は佐賀県内で最も広い。
- 地域の特徴：気候は夏もそれほど暑くなく、冬も暖かい比較的過ごしやすい地域である。昔から交易の要所で、人柄は割と明るくて気さくな気質があると言われる。
- 事業所の立地：唐津市の中心部に位置している。事業所の北側は昔ながらの住宅地で地域の結束力も強いが高齢化率も非常に高い。移動難民、集いの場所の確保などの課題がある。



施設事業所紹介

- 平成25年5月法人設立

(主要事業)

小規模多機能型居宅介護セカンドハウス・シェアハウス百花(グループホーム:1ユニット)

居宅介護支援事業所スマイルソーシャルワーカーズ・ちよいサポ(総合事業:訪問型サービスA)など

(従業員数) 合計31名

- 法人として大切にしている点

①職員個々がソーシャルワーカーとしての資質を身につけ、単に介護施設としてだけではなく、職員各自が地域のことを「我がごと」と考え、それぞれの「スマイル」を希求し積極的に地域課題の解決に取り組むこと。

②「スマイル・エンジョイ・チャレンジ」をスローガンに職員と利用者、地域が一緒になって楽しむこと。



活動紹介

認知症カフェ

- 施設名であるシェアハウス百花の名称にちなみ「Momo Cafe」と命名した。
- 開催頻度は毎月第3金曜日、参加費は一般の参加もボランティアとしての参加も一律300円とした。
- 対象者は特に定めないが、できるだけ近隣住民(徒歩10分内くらい)を対象にした。
- 認知症の当事者、家族、地域のボランティアなど毎回15名から25名程度が参加している。
- 認知症の人の外出先としてだけでなく、参加者の当事者意識の醸成「参加」から「参画」を促す。
- 毎回テーマを決め(年間計画)、参加者が認知症のことを学んだり、考える時間を毎回つくった。



ボランティアを中心としたカフェの開催

時には参加者よりボランティアの方が多くなることも



テーマの例

認知症の人の「風呂に入らん」という言葉に対して、「してはいけない対応とは何か」について参加者で考える。

活動紹介

認知症サポーター養成講座

- 主に事業所の所在する日常生活圏域内で地域住民を対象として、1回の開催あたり約15名以内の人数で開催。
- 概ね3カ月に1回程度の頻度で開催した。
- 内容は「認知症の基礎的理解」に加えて、「認知症を支えるために各自が何ができるのか」について、具体的な実践内容を考えるワークを行い、実践力に重きを置いた内容で行った。
- ワーク内容で、地域貢献意識の高い受講生に関しては希望を聞いたうえでメーリングリストに登録し、事業所や地域での行事等とボランティア活動のマッチングを行い、実践の場を提供した。



それぞれが着実に学びが得られるよう、敢えて少人数で開催。

ボランティア育成の取り組み

- ボランティアの学びを進めるため、ボランティアだけを集めて学びを深める機会をつくった。
- 「必要とされるボランティアとは何か(グループワーク中心)」「認知症の人の移動支援について学ぶ」などの学びの機会のほか、認知症カフェで来場者に楽しんでもらうための寸劇(テーマ「認知症困った、こんなときどう対応する」)を一緒に考えてもらうなどの取り組みを行った。

取り組みの概要

「支えられる」から「支える」へ（近所にお住いのAさんの例）

- 最初は施設の利用相談であったが、自立度が高かったため、介護保険のサービスを使う前にまずは地域資源との考えから認知症カフェに案内した。
- 認知症カフェに参加し、その縁で近所の仲間と一緒に認知症サポーター養成講座を受講した。
- 認知症サポーターでのワークを通し、自分でできることは何かを考えてもらった。昔の仕事であった看護助手の経験から認知症の人の話し相手は慣れているとのこと。デイサービスは利用せずに週に1回のボランティアで施設の認知症の人の話し相手ができないか提案してみた。



Aさん

現在は週に1回の施設へのボランティア（お皿洗いや認知症の人の話し相手）として活躍している。本人から「ここで使ってもらえるのが何より生きがいです」との発言があり、現在も介護サービスを使わずに地域での暮らしを継続している。

取り組みの成果

参加から参画への意識変容

- ボランティア育成の取り組みを通し、「ボランティア」がボランティア先の施設等にとって「お客様」にならないよう、「実際の支え手として戦力になること」が重要であることについて意識付けを行った。
- 認知症カフェの場を中心にボランティアの「参画」への意識が高まった。
- お茶を出す係、受付、話し相手などボランティアそれぞれが自分の役割を担うようになった。ボランティアが実際の戦力としてカウント出来るようになることで、認知症カフェにかかる事業所スタッフの負担を少なくすることが出来た。
- 他にも事業所の行事などの際には自分から「何か手伝うことはないか」と声をかけてもらうようになった。



ボランティア勉強会

実際に意識の高い地域住民を集めて「ボランティア主体について考える」をテーマにグループワークを実施した。

これを機に、ボランティアが「お客さん」から「支える人」へ意識変容が起こった。

取り組みの成果

認知症の人にとっての成果

- 地域の認知症の人が集う場所が出来るようになった。実際に認知カフェでは認知症の人の参加があり、介護保険を使わない外出先としての地域資源となった。
- 認知症カフェで専門職が関わることで認知症の人の早期発見、早期対応につながった。
- 少数ではあるが、認知症の当事者が自身の認知症を前向きに受け容れるきっかけとなった。「誰も教えてくれなかったけど、私はやっぱり認知症なのね」の発言があった。

地域にとっての成果

- 認知症の人を巻き込んだ地域の集いの場を通して、地域のつながりを持続できるようになった。
- 事業所と地域が、地域の課題などを情報共有できるようになった。
- 地域の人が「自分たちも人ごとではられない」といった互助の考えを共有するきっかけとなった。



地域との取り組み

一人の要介護高齢者を災害時にどのように避難すべきか、地域住民でどこまで出来るのかを事業所と一緒に考えてきた。

取り組みの成果

事業所にとっての成果

- 地域からの信頼を得ることで「何か困ったらあそこに相談すれば」と思ってもらえるようになった。結果として、利用者の増加につながった。(グループホームの待機者数では市内で最も多い事業所となった)
- スタッフの手薄な時間帯などを補完するために、見守りなどのボランティアを適時活用できるようになった。
- 多様なボランティアが関わることで、スタッフだけでは対応できない利用者のニーズや楽しみに対応できるようになった。(囲碁・麻雀・フラワーアレンジメントなどの趣味活動へのボランティア)



ボランティアと一緒に
健康麻雀クラブ

利用者だけでなく、地域住民や他施設の利用者など、同じ趣味を持った人たちの集いの場になった。



利用者の外出支援の援助

「認知症の人の移動をどうするか」をテーマにボランティアに学んでもらい、実際に利用者の外出支援を手伝ってもらった。利用者の楽しみとボランティアの学びの機会を同時につくった。

今後の課題(アイデア)

認知症など、判断力が低下した人の権利を地域で擁護する仕組みづくりを地域と共同でできないか

- 現在当法人2名が佐賀県社会福祉士会に所属し、合計11名の成年後見と1名の未成年後見を受任しノウハウや経験の蓄積を行なっている。
- 成年後見人の役割でもある「身上監護」のうち、被後見人等の定期訪問などをボランティアが担えるような仕組みが考えられないか。パワーレスにある人の権利擁護と、ボランティアがより高い専門性を発揮しやりがいを感じられるような仕組みに出来るのではないか。
- 当法人が法人後見としての担い手となることで、実践をより進化させることが出来るのではないか。

他の地域へどう波及していく必要があるか

- 地域によって考え方や風土が違う中で、それをどのように捉えて手段をどうしていくか。
- 地域のキーパーソンを見つけることが必要。「全体としてどうか」の視点と「誰が動いてくれるか」を同時に見極めていく視点の重要性。

認知症介護指導者研修の学びを実践に どう活かしたか

① 「どういった地域を目指したいか」地域での共有。(認知症ポジティブの視点)

- 「通いの場を認知症予防に」では長続きしない。認知症カフェを含めた集いの場では、指導者研修で学んだ「認知症ポジティブ」を基本として「認知症の人と一緒に楽しむ場」と考える。「結果として認知症予防につながるかも」の視点。

② 実践が目的ではなく手段であること。(クリティカルシンキング)

- 「この活動は何のために」「それを行うのはなぜ」の視点。指導者研修で積んだクリティカルシンキングの経験が、実践が何のために行われているのかの意識につながり、近視眼的になることを防ぐことが出来た。

② 「地域が学ぶ」ことをどう進めるか、またその手法。(対話型の授業)

- 地域の学びの為には、地域住民の当事者意識「我が事」を持つことが必要。
- 当事者意識を持つためには「知る」だけではなく「考える」が重要。講師と受講生がともに同じ課題を共有するために、指導者研修での学びである「対話型の授業」を活かすことが出来た。